面の付け方も堂に入ったものです

のびのびと剣道を楽しむ広安剣友会の子どもたちと指導者の皆さん

双子で剣道の腕を磨いている濵谷（はまたに）きょうだい

勇ましく 広安剣友会

夕刻の広安西小学校の体育館に、竹刀と竹刀がぶつかり合う音が響きます。日本が誇る武道・剣道で、心身の鍛錬を積んでいるのは広安剣友会の皆さんです。現在、広安小、広安西小、益城中央小、飯野小、長嶺小（熊本市）、益城中の児童と生徒たち男女26人が在籍。その中で小学校低学年の子どもたちが剣道着と防具に身を包んだまだ幼い体で、前へ前へと押し出し竹刀を振る姿は勇ましいものです。

「広安剣友会は青少年の健全育成を目的に、昭和49（1974）年に発足しました」と話すのは会代表の坂澤光司（さかざわこうじ）さんです。坂澤さんが剣道を始めたのは中学生の頃で、社会人になり同会の若手として指導の手伝いを始めました。以来40年以上にわたり会をけん引してきた坂澤さんを筆頭に、会の卒業生や保護者経験者、若手の剣道経験者の全員がボランティアで指導に携わっています。

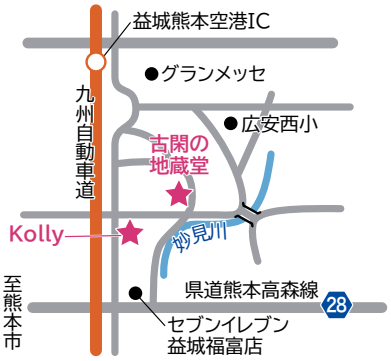
「剣道を通じ、子どもたちの心の成長を見守るのが楽しみです。どの子もかわいくてね」と目を細める坂澤さんの元に、一人の男の子が防具の付け方を尋ねにやって来ました。「そろそろ自分でできなきゃね」と坂澤さんは優しく言い聞かせて直してあげます。高学年の子どもたちの面手拭いのかぶり方は手慣れたもので、中学生になると指導者の助手を担うなど、それぞれの成長ぶりが伝わります。

保護者たちも稽古の様子を温かく見守っています。いつか子どもたちが大人になった時、こうして仲間たちと竹刀をぶつけあったこの時間のことが胸に甘い思い出となることでしょう。

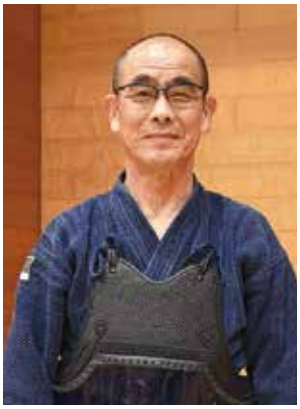
散歩の終わりに

「古閑の地蔵堂」に集まった北村さんたちは、松岡さんと親子のように接します。古閑で生まれ育った松岡さんは「いくつになっても、おばちゃんたちからは子ども扱い」とうれしそうに応えます。

こうしたほのぼのとした関係性は、何ものにも代え難い宝物です。教え、支え合い、守る。古閑地区の人たちの、温かいつながりを感じた時間でした。



ちょっとそこまで わがまち散歩 古閑 編



上／あどけない笑顔を見せる小学校低学年の子どもたち
右／長年、ボランティアで剣道の指導をしている坂澤さんは剣道教士７段です